

水産業強化支援事業事後評価報告書

滋賀県水産試験場

政策目的		水産資源の持続的な利用・管理の推進	
政策目標		資源増養殖目標 No. 4-01	
事業実施主体		滋賀県	
実施地区名		琵琶湖	
実施期間及び目標年度		実施期間	目標年度
		令和4年度	令和4年度
交付金額		446千円	
事業計画の内容		琵琶湖のアユ資源管理に資する資源状況調査	
評価	成果目標		
	現状値	(令和4年度末時点) ①魚群探知機を用いたアユ分布状況調査(1~3および8月) 4回 ②漁具を用いたアユ分布状況調査 4回 ③餌料状況(プランクトン)調査(9~2月追加調査) 6回	
	目標値	(令和4年度末) ①魚群探知機を用いたアユ分布状況調査(1~3および8月) 4回 ②漁具を用いたアユ分布状況調査 4回 ③餌料状況(プランクトン)調査(9~2月追加調査) 6回	
(1) 現状値の説明		琵琶湖の重要漁業対象種であるアユは、近年漁獲が不安定な状況が続き、漁業者のアユ資源に対する不安が増している。このため、アユ資源量や成長、それらに影響を与える餌料状況といったアユの資源状況をより即時的に把握する必要が高まっている。本県では従前より魚群探知機を用いた分布状況調査や定点定期観測でプランクトン調査を実施してきたところであるが、近年の状況を受けて、これらの調査を拡充して行う必要があり、現状値は拡充して行った調査の実施回数とした。また、アユの生育状況や分布状況を把握するには、試	

		<p>験漁具を用いてサンプルを採集する調査を行う必要があり、現状値は調査の実施回数とした。</p>
	(2) 地域への経済効果 (ハード事業のみ)	
	(3) 資源管理の取組状況等(ハード事業のみ)	
	(4) 所見	<p>魚群探知機を用いた分布状況調査では、従来の水深 30m の周回調査はその水深以外の魚群の分布は把握できなかったが、東西に 21 本のトランセクトライン上の調査を拡充して実施することにより 1~3 および 8 月の琵琶湖全域の分布状況を把握できた。漁具を用いた分布状況調査では、10~12 月に小型沖曳網および灯火トラップによる調査を行い耳石日輪解析により産卵時期別の生育状況を把握した。餌料状況調査では、9~2 月の従来の各月 1 回の調査に加え各月 2 回の調査を実施することにより、アユ仔稚魚期の餌料状況をより詳細に把握した。</p>
	(5) 評価機関の意見等	評価機関なし
今後の改善方向等に関する分析		<p>調査結果のアユ資源状況に関する情報は、漁業者による資源管理の取組や、人工河川等の増殖対策に活用できることから継続して実施する必要がある。</p>

水産業強化支援事業事後評価報告書

滋賀県水産試験場

政策目的	水産資源の持続的な利用・管理の推進	
政策目標	資源増養殖目標 No. 4-02	
事業実施主体	滋賀県	
実施地区名	琵琶湖および周辺水域	
実施期間及び目標年度	実施期間	目標年度
	令和4年度	令和4年度
交付金額	465千円	
事業計画の内容	琵琶湖沿岸域の漁場生産力向上に関する調査、および西の湖等の漁場における環境状況調査とアユ等の着臭メカニズムの解析	
評価	成果目標	
	現状値	① 適切な耕耘強度把握実験：3項目（水温、植物プランクトン、栄養塩） ② 西の湖等漁場環境動向モニタリング：4回 ③ アユ着臭状況の把握：3回 （令和4年度末時点）
	目標値	① 適切な耕耘強度把握実験：3項目（同上） ② 西の湖等漁場環境動向モニタリング：4回 ③ アユ着臭状況の把握：3回 （令和4年度末）
	(1) 現状値の説明	①沿岸域の漁場生産力向上については、適切な湖底耕耘の実施条件強度を把握する実験の調査項目数（時期と関連して水温、強度と関連して栄養塩、それらの結果として生じる生産力と関連して植物プランクトン）を、②西の湖等漁場環境動向モニタリングおよび③アユ着臭状況の把握については、現状把握のための調査頻度を現状値とした。
	(2) 地域への経済効果 (ハード事業のみ)	
(3) 資源管理の取組状況等 (ハード事業のみ)		
(4) 所見	① 水産試験場内の試験池で異なる時期(8月、11月、1月)に異なる強度で耕耘を実施し、水温および底泥間隙水からの栄養塩の回帰状況と植物プランクトンの増殖状況を確認した。	

		<p>② 西の湖で7月に魚類採捕調査を、10月に底質調査を、1月と2月に流速調査を実施し、漁場環境の現状を確認した。</p> <p>③ 異臭魚の発生状況に関して沿湖漁協にアンケート調査を実施した。過去に異臭魚が発生した水域で漁獲されたアユ計4サンプルを化学分析に供した。また過去に発生した水域および非発生水域で水質と底質、異臭の原因となる藻類の調査と結果の比較を行った。</p>
	(5) 評価機関の意見等	評価機関なし
今後の改善方向等に関する分析	<p>① 令和2年度からの3か年にわたる試験により、異なる水温条件下における底泥の耕耘強度と底泥から直上水への栄養塩回帰およびそれに伴う植物プランクトンの増殖との関係を検証できたため、令和4年度にて終了する。</p> <p>② 引き続き漁場環境の動向を調査して現状を把握し、課題解決に資するデータ収集に努める。</p> <p>③ 本年度は、過去に異臭魚の発生が確認された水域での再発生は確認されなかったが、アンケート調査の結果からそれ以外の水域でも異臭魚が漁獲されるケースが判明した。そのことを踏まえて、調査を継続して実施する。</p>	